信毎俳壇

坊城 俊樹 選

晩成もせず着ぶくれし背中かな　（千曲市）たじまたける

初明り生命線を指で追ひ　（安曇野市）丸山 進也

君乗せて夜行バス発つ名残雪　（松川村）岡 豊村

逃げ回るドッジボールや凩来　（下諏訪町）木口 碧

北風にゴム紐つきの児の帽子　（長野市）田中 重実

この中に悪い人無し初詣　（長野市）中沢 義寿

ローランサンの淡き色あひ冬日和　（長野市）小林 明男

明王の玻璃の眼や紅葉散る　（佐久市）赤岡 厚子

ロミオよロミオ雪女郎すぐそこに　（長野市）武田 芳子

漆黒の緞帳上がる冬の朝　（小諸市）佐藤ゆきな

佳作

師走風シャッター街を賑やかし　（飯田市）吉沢 奨

何の木と分らぬほどに雪囲　（長野市）荻原 宏祐

選評　一句目、「大器晩成」という言葉がある。大きな器はすぐにできるものではなくて人も徐々に形成されるものである。作者はしかしそのことをこう言う。そんな人こそ大きな心を持つ大器ではないか。二句目、今年の運命を祈る。生命線は確かにしっかりと刻まれている。これぞ吉兆である。三句目、春になって降る最後の雪に君は出発した。名残惜しいがこれからの君の人生に幸あれと思う気持ち。

今井 聖 選

冬ぬくし思ひこぼるる麻痺の口　（長野市）福沢 ナナ

雲雲の組んづ解れつ軋みつつ　（飯田市）大石 昭重

焚火する子らの中なる翁かな　（中野市）田川 寿男

冬麗（ふゆうらら）警察犬の長あくび　（須坂市）富田 孝弘

メビウスの帯を我が身に初御空　（安曇野市）丸山 進也

一人だけ冬日眩しき双児カー　（須坂市）牧野 勇水

冬夕焼ほどに卵をときほぐす　（千曲市）たじまたける

駆け上がる坂の向かうに初御空　（長野市）宮沢 朝子

猫の名の後に子の名や年賀状　（東御市）清水 恵子

忘年会終着駅に絆あり　（立科町）村田 実

佳作

滑り来ては水洟拭いてすぐリフト　（大町市）原田 勝

凍つる夜の猫の眼アルデバランなり　（埼玉県上尾市）小村 勝子

選評　一句目、「思ひこぼるる」が麻痺（まひ）の口の不自由さを余さず表現し得ている。「冬ぬくし」の日常感もリアル。二句目、重たく見える雪雲の動きを表して見事。特に「軋（きし）みつつ」が良い。三句目、この翁（おきな）と子らはどういう関係だろうか。あるいは偶然の出会いか。それとも良寛のような子供好きな人だろうか。四句目、緊張を強いられる警察犬の長あくびは見る側もほっとするところがある。

神野 紗希 選

焼かれしか聖樹と育てられし木も　（松本市）久我 綺乃

荒磯の牡蠣採る指を火に解く　（宮田村）金本 牧子

河豚の毒メガロポリスに翠の灯　（小諸市）加藤 陽介

餅つきの前夜に星の微熱かな　（塩尻市）神戸 千寛

クリスマスキャロル流るる授乳室　（下諏訪町）中村 久

冬の田に電柱の影折れゐたる　（長野市）田中 重実

選択肢Bは安全朝の雪　（岡谷市）里山 子

冬帽子自深に抹茶ラテ二つ　（松本市）伊藤 和夫

オリオンや柩の姉へこぼれけり　（長野市）井出 節子

着ぶくれてポッケにくしゃと飴の紙　（佐久市）佐藤 勝子

佳作

大霜につぼみ残して赤き薔薇　（小諸市）佐藤ゆきな

鳩の子や母の水尾の中に浮く　（中野市）中野可菜乃

選評　一句目、クリスマスツリーとなるべく育てられた木も戦火に焼かれたか。祈りの依り代すら灰に変える悪虐（あくぎゃく）。戦地の民の無事を祈る。二句目、荒れた海での漁はさぞ冷たかろう。たき火にかざせば指に血は巡り、緊迫した心も解ける。三句目、毒を恐れつつも河豚（ふぐ）を食らう貪欲が、大都市に蠢（うごめ）く欲望を象徴する。灯の寒色も冷たく文明を彩って。四句目、「星の微熱」の詩情に、巡る時間への敬虔（けいけん）がにじむ。